
ウィザード・テイルズ

T S U K A S A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザード・テイルズ

【Nコード】

N0003Y

【作者名】

T S U K A S A

【あらすじ】

年^{フアリッサ}に一度、ここ天界ではある闘いが始まる。

その闘いに参加するのは人間界の中学生。

そしてここにも一人その闘いに無謀に挑戦する者がいた。

しかし、それは何かの手違い？

間違っ^{フアリッサ}て連れてこられた、闘うには不向きな主人公。

今までの生活が180度変わってしまった主人公。

どこか弱気な主人公。それでも主人公！

様々な魔法が飛び交うファンタジーな物語。

プロローグ

気が付けばそこは知らない場所だった。

草原の中、僕の後ろには大きい湖があった。

そして目の前には知らない2人組の男女。何か変な格好をしている。全身を紅く包むローブに背中には金の十字架が模様がある。

もう一人は蒼いローブで同じく背中に金の十字架の模様がある。

その二人の男女は歳は………18くらいだろうか。女性の方は金髪
のポニーテールで赤いリボンをしてい
て目の色は透き通るような綺麗な緑色で肌は白かった。

男性の方は黒の短髪で赤い目をしていた。

しかしその目はやがて点になり呆けていた。そして女性の方がプル
プル震えだし下を向きもう一人の男性へ話しかけた。

「さうてクロード、あたしの質問に正確に答えてね」

「あ、ああ」

クロードと呼ばれる男性は汗を流しながら答える」

「では質問その1。あたしたちが連れてくるべき子の名前は？」

「佐藤 龍一だ」

龍一！？何で龍一の名前が出てきたんだ？この人たちは一体……。

「そうね、じゃあ質問その2。この少年の名前は？」

僕のことだろうか？男性がこちらを覗き込むように見ると……

「荒川 悟だな」

「!!!!!!!!!!」

何で！？僕の名前が……この人は僕の何を見たって言うんだ。

「そうね、じゃあ最後の質問ね。一度天界に連れて来られた子供はどうなるの？」

「そうだな……一度連れてきたら変更はできねえな。勿論、人間界へ返す事も……」

天界？人間界？この人たちは何を言っているんだ。帰ることができない？そんな……僕はついさっきまで学校に居たのに何でこんな所に

時は数時間前にさかのぼる僕が友達の龍一を見つけて声をかけようとした時だ。何も無い空間からいきなり手が伸びてきて僕は捕まり気が付けばここにいた。

プロローグ（後書き）

初めての人もそうでない方もいるでしょうか？TSUKASAです。
魔法の世界のファンタジーです。弱気な主人公がどんどん強くなっ
ていくところを見ていってください！感想待ってます！

それが僕の世界が変わった日の始まりだった

僕の名前は荒川 悟。今日から中学1年生になる普通の男子だ。

「おっす！悟、何だ？元氣ねえじゃん、俺ら今日から中学生だぜ？」

僕の肩を後ろから叩いて声をかけてきたのは、小5からの親友、佐藤 龍一だ。龍一とは小5の時に同じクラスで初日に隣の席になり仲良くなった。6年生の時は別のクラスになったけど、登下校は龍一と歩いている。他にも友達はいるけど、やっぱり龍一が一番仲がいい。

「ふぁー朝から元氣だね龍一。僕、不安で緊張して眠れなかったんだ」

実を言えば僕は龍一が友達になるまで小学校の頃は一人でいる事が多かった。友達を作るのが苦手だったんだ。それができるようになったのも龍一のおかげだけど、やっぱり中学に入ると知らない人がいっぱいいる。不安が捨て切れなかった。

「もっと喜べよ悟！やっと俺ら中学生になったんだ！楽しい事がいっぱいあるじゃねえか！部活に勉強体育祭に修学旅行に文化祭。小学校じゃどれもショボかったけど中学では全然違うんだ。それに俺は将来は偉い弁護士になるんだ！」

そうだ龍一が初めて会ったときから言っていた言葉だ。やっぱりすごいなあ龍一には夢があつて。

「なれるよ龍一なら。なんたって君は小学校の頃から、成績優秀・スポーツ万能で……おまけに女子にはモテるし」

「そうだっけ？」

どれに疑問を抱いたのかは分からないがどれも間違つてはいないはずだ。テストの時にはほとんど満点だったし、マラソン大会の時には毎回1位。友達になる前から龍一は有名で僕も少し憧れていた。バレンタインの日には引出しや、ランドセル、靴箱の中にまで一杯ぜんになっていて本人は迷惑がっていたけど一部の複数の男子からは羨望ぼうと妬みの眼差しが記憶に残っている。

「僕なんて得意なことと言えばコントロールの良さくらいかな……」

「確かに悟ってコントロールだけは一番だったよな」

そう、僕が一つだけ得意としていること。それは物を投げるときのコントロールの良さだ。これだけは誰にも負けない自信があつた。それがきっかけでリトルの少年野球チームに一時期は入っていたが、

体力がもたず、すぐにやめてしまった。

「悟は野球部には入らないのか？俺はサッカー部に入ってみようと思うんだ！野球が嫌なら一緒にサッカー部に入らねえか？」

「うーん……龍一と一緒にいいかな。何か野球部って厳しそうなイメージあるし、サッカーもやってみたいかも」

龍一となら頑張れるかもしれない。僕は心の中でそう思った。

そしてしばらくその場で喋っていると周りの生徒が走り出した。予鈴のチャイムが鳴ったんだ。

「やっべ！急いで体育館まで急ぐぞ悟！初日から怒られたくないからな」

「うん！」

そして僕と龍一は走り出した。

それが僕の世界が変わった日の始まりだった。

それが僕の世界が変わった日の始まりだった（後書き）

主人公は大抵の事が人並み以下のひ弱な感じですがコントロールが良いつていう部分だけって主人公っぽいですかねえ？主人公の長所を生かしてだんだん格好よくしていきたいと思います。感想待ってます！

な、友達なんてすぐできんだろ？

体育館へ入り学校別に並べさせられた。僕は龍一の隣へ座り、先生達の話を聞いていると次第に眠くなりウトウトしていると。

「では新入生代表で佐藤 龍一君！前へ出てきてください」

「はい！」

龍一の名前が出てハッと目を覚ました。新入生代表？すごいなあ龍一は代表にまで選ばれるなんて。

龍一は立ち上がり校長先生らしき人の所まで歩いていく。そこで代表としての挨拶をした。……挨拶が終わると拍手が広がった。勿論僕も思いつき手を叩いた。

入学式が終わり、1年生校舎へ向かう僕と龍一。そこでクラス分けの張り紙があった。

「クラス………違うね」

「ああ、残念だったな」

僕は5組、龍一は3組だった。

「俺、荷物置いたら悟のクラスに行くよ！」

歩きながら龍一がそう言ってくれた。

「うん！ありがとう！」

そうだ、別に会えない訳じゃないんだ。僕は安心した。そしてお互いのクラスに入り席に着いた。

席に着いたのはいいけど……早速何をすればいいだろう。周りは知らない子ばかりだ。もう何人かは友達と話をしている。

（……やっぱり出遅れてしまった。どうしたらいいんだろう）

そんな事を考えながらボーっとしていると。

「さ〜とる〜！」

廊下の方から声が聞こえた。龍一？声はするけど姿が見えてこない。

廊下へ出てみるとすでに何人かの生徒に囲まれながら少しずつ歩を進めてくる龍一の姿があった。

「……龍一！」

龍一がこちらに気付き手を振り返す。そのせいか自然と周りの人が離れる。

「さっそく人気者だね龍一は」

「お前もすぐできるよ、みんないい奴ばっかだし」

「そうかな？」

そんな会話をしていると、一人の男子が僕に声をかけてきた。

『君、佐藤君の友達？』

「友達って言うか…親友だな！荒川 悟だみんなも仲良くしてくれよな！」

先に龍一が応えた。その言葉にみんなが驚く。

『え〜！親友って事は、佐藤君の事とか何でも知ってるの！？』

男子だけではなく女子にも詰め寄られた。こういうのは初めてだ。

「え？まあ多少は……」

「悟ってなコントロールがすごくいいんだぜ！」

龍一がさらにかぶせてくる。まあそれはホントの事なんだけどね。

『え〜！！マジかよ！？俺、野球部に入るんだけどよかったら一緒に入らないか？』

坊主刈りの男子の顔が近くなる。えっと……………

「ぼ、僕は龍一とサッカー部に……」

『そっかゝまあそれじゃあ仕方ないな』

坊主刈りが落胆する。何か悪い事しちゃったなあ。

『ねえ小学校の頃って佐藤君、どんなだったの？』

「え、えっと」

僕はいろんな人に質問攻めに遭い龍一の方に視線を送った。

（な、友達なんてすぐできんだろ？）

龍一が笑いながら僕にそう言っているように思えた。

（うん！ありがとう！龍一）

僕も心の中でそう思った。そしてこの時はまだ知る由も無かった。まさか、あんな事になるなんて。

な、友達なんてすぐできんだろ？（後書き）

龍一はひたすらに格好いいです！！それにめっちゃいい奴！このまま悟と龍一の楽しいスクールライフが始まれば良いんですけどね。次回からそうもいかなくなります。感想待ってます！

いくら全てが良くたって……顔がダメなら却下!!

悟が龍一のクラスメイトと仲良く会話をしている。その人間界とは別次元の天界では……。

「ねえ『クロード』、今日だよ。あたし達が担当する人間界の入学式って」

何も無い草原で金髪ポニーテールで緑目の女がもう一人の男へ問いかける。

「ん？ ああそうだったな」

クロードと呼ばれる黒髪短髪で赤目の男は肘を付き横になりながら応えた。

「そろそろ探しに行かないと時間に間に合わないんじゃないの？ あと1時間くらいだよ」

「……………ん？」

クロードはポケットにしまってあった銀時計を開く。

「ぬぁ！？まずい！早く行くぞ！」

「だーからさっきから早く行こうって……………」

おんなは振り向くとそこにクロードの姿は無かった。

「あゝいゝつゝ。この『シュレイナ』様を残して先に行くなんていい度胸してるじゃない」

シュレイナは立ち上がり遠くの方にいるクロードを追いかけた。

「待てゝ！」

ゝ場面変わり北の湖ゝ

ここは北の湖。天界から人間界を除く事ができる場所。

「ハア、やっと着いた」

クロードは息を整えながら周りを見渡した。他の天界人の姿はみえない。

「あとは、俺らだけか」

そこへシュレイナが追いついてきた。

「いきなり走り出さなくてもいいでしょクロード！」

そしてシュレイナも天界人は自分達しかいない事を確認する。

「……あたし達だけね。ちょうどいいわ、他の奴らに情報が伝わることも無いし」

「とにかく、早く人間界から一人選んじまおうぜ。ホントに時間が無くなる」

クロードが湖の近くまで行きシュレイナをせかす。

「ちょっと待ちなさいよクロード！ あんた今年からなんでしょ？ ただ誰でもいい訳じゃなくって……」

シュレイナが途中まで言いかけたところをクロードが続ける。

「わかってるさ、頭がよかったり、体力のある奴を探すんだろ？」

「そう、後は精神力もね。私達、天界人の持つ天眼で人間を見ると、その人間の頭の上に名前とその人間の『体力・知力・精神力』が表示されるの」

「ふーん………ホントだあいつは『体力40・知力70・精神力45』か……」

クロードが珍しそうに見ていると。

「ちょっとそんな子選ばないでね。確かに知力は高いけど、他が半分以下じゃない、人間界でいうガリ勉って奴ね。顔がそんな感じだもん。もっと全体的にいい子じゃないと……」

「でもそんな人間がいたらとくに連れて行かれてるだろ」

クロードの意見にもっともだと言わざるをえない顔をしているとシュレイナが湖に映る人間達を見て、一人の男子に目が留まった。

「あゝ！」

いきなり叫ぶシュレイナにクロードが振り返る。

「何だよ！いきなり、そんなにびっくりするほどの奴がいたのか？」

「そのまさかよ、私も何人もの人間達を見てきたけど……この子は別格だわ」

「どれどれ………何ゝ！？」

クロードもその子供をみて後ろに退いてしまった。

「た、体力95・精神力90・知力100！？こんな人間が存在するのかわよ？」

「ま、いるんだからいいじゃない？」

シュレイナはすぐに平静を取り戻した。

「よし、それじゃあこいつを……」

クロードが湖に手を伸ばすと。

「ちょっと待ちなさい、よ！」

バコッ!!

シュレイナが小型ハンマーを取り出しクロードを殴った。

「ってゝな！何すんだよ！？大体どっから出したそのハンマー！」

「細かい事は気にしないの……それよりも大事なことがあんのよ」

シュレイナがハンマーを後ろに隠しながら言う。

「何だよ？大事な事って……」

シュレイナが一度、後ろを向く。そして振り返りながら……

「……………顔よ！」

クロードが一瞬こけそうになる。

「お前なく時間が無いんじゃないのかよ？」

「いくら全てが良くなったって……顔がダメなら却下！！」

「こりゃもうダメだな……」

クロードが呆れている次の瞬間にその子供がシュレイナの見える位置に振り返った。

「……………え？」

いくら全てが良くなったって……顔がダメなら却下!! (後書き)

ちよつと長くなってしまいましたね(汗) ちょうどキリのいいところが無かったもので……シュレイナが見つけたあの子。みなさんは分かりますよね? という事はその顔も。しかし次回はシュレイナが暴走し大変な事になります。

感想待ってます!!

……悟が頭の中から消えていた。

湖に映っている子供が振り返りクロードもその顔を見た。

「ふーん……まあ別に普通なんじゃないか？　どうなんだシュレイナ」

クロードがシュレイナに問いかけるとシュレイナはボーっとしていた。

「……………えー？　……………そ、そうね……………い、いいんじゃない？」

シュレイナはやけにあわてていた。

（なによ！　結構いい感じの子じゃない。あの子に決定ね！）

「えーっと、佐藤 龍一かあそんじゃあこいつでいいんだな？」

「他にどの子がいるって言うのよ！　早くしなさい！　湖に手を入れたらそのまま人間界に通じてるからそのまま掴んで引き上げればいいのよ！」

「とは言ってもなあ、周りに人間が多すぎるんだよ。もう少し待ってからでいいだろ？」

しかしシュレイナは両手を上げグーにして騒いでいる。

「ダメよ！今すぐに連れてきなさい！！」

その瞬間シュレイナの体の周りにロープが現れシュレイナの体に巻きついた。

「ちょっと、何すんのよ！？」

そのロープはクロードの出したものだった。

「悪いなシュレイナ、ちょっとそこでおとなしくしといてくれ。…さてと、じっくり待つとするか。あんまり時間も無いから早く一人になってくれよ？」

クロードが湖に映る龍一に言ってみる。当然、龍一には聞こえてはいない。そのころシュレイナは。

(……よし、後はこのナイフでロープを切れば……後で覚えときな

さいよゝ

一人黙々と袖口から出したナイフでロープを切っていた。そしてしばらくすると龍一の周りから人が少なくなる。

「よし、そろそろいいだろう、よっと」

クロードが湖に手を入れた。……と、同時にシュレイナのロープも切り終えた。

「おりゃゝ！クロード、覚悟！！」

シュレイナがクロードに飛び掛ろうとした。

「げ！？おい、ちょっと待てよ！」

ゝ場面変わり人間界の悟たちの学校ゝ

僕はホームルームのチャイムが鳴ったので各自の教室へ戻り、担任の話を聞いていた。

「明日の持ち物は……と……と……です！忘れ物をしないように。それでは今日はこれで終わりです各自これから自由行動です。部活の見学を試してみるのもいいでしょう。解散です！」

担任の先生が号令を告げると生徒達は各自帰り支度をした。

（龍一は部活の見学するのかな）

僕は龍一のクラスに行ってみたがそこには龍一はいなかった。

「どこいったんだろ？」

とりあえず靴を履き替えて校舎の外に出てみる。また他の生徒に囲まれてるのかな。

「おい！さ〜と〜る〜！」

遠くから龍一の声がした。振り返ると龍一が走ってこっちへ向かって来ていた。

「あ！龍一〜！」

次の瞬間、制服の襟首を掴まれた感じがした。

「……………え？」

そして周りの生徒達の動きが止まり。辺りの風景が灰色一色になった。

（何だこれ！？僕以外がみんな止まってる……………何かに後ろから掴まれている）

首だけ後ろに動かして見ると、そこには何も無い空間から手が出てきて僕の襟を掴んでいた。次の瞬間すごい勢いで引っ張られて目の前の風景が真っ白い空間に変わった。

「うわあああああ！！」

そして悟は人間界から消え、何事も無かったかのように時間が再び動き出した。一方龍一は、

「えーっと……………誰を見つけたんだっけ？あれ？思い出せない……………」

……悟が頭の中から消えてていった。

……悟が頭の中から消えていた。（後書き）

何の手違いか、悟が連れて行かれてしまいました。でもこれでいいんです。残念ながら龍一の出番はここで終わりになってしまいました。ごめんなさい。

物語はプロローグからになります。感想待ってます！！

僕が……魔法使いに!?

「天界の北の湖にて」

シュレイナがクロードに飛び掛りクロードはすでに湖に手を入れていた。しかしシュレイナをもう片方の手で制しながらだったのでほとんど手探りである。

「ちょっと待ってってシュレイナもう少しなんだ!」

「そんなモン知るかあ!よくもシュレイナ様を……ただじゃおか
ないんだから!」

そんな時にクロードの手が何かを掴んだ。

「お、こいつは!」

そしてその手を勢い良く引っ張ると……

ザッパッン!!!!

湖から一人の男の子が引き上げられた。

そしてその男の子を見ると。

「「……………誰？」」

2人の声が重なった。

（悟の視点）

僕はいつの間にか真っ白な空間を何かに引っ張られていた。

（何だよこれ!?!）

そして眩しい光が見えてくる。何処へ繋がっているんだろう？

……………目を開けるとそこには、ずっと草原が広がっていてすぐ後ろには湖があった。そして目の前には見知らぬ男女がいた。2人とも全身を包むローブを着ている。女性の方は紅く背中には金の十字架の模様で男性の方は蒼く同じく背中に金の十字架、歳は2人とも18くらいだろうか。

そして女性の方が男性の方に話し始めた

「さくろクロード。あたしの質問に正確に答えてね」

「あ、ああ」

クロードと呼ばれる男性は汗を流しながら答える」

「では質問その1。あたしたちが連れてくるべき子の名前は？」

「佐藤 龍一だ」

龍一！？何で龍一の名前が出てきたんだ？この人たちは一体……。

「そうね、じゃあ質問その2。この少年の名前は？」

僕のことだろうか？男性がこちらを覗き込むように見ると……

「荒川 悟だな」

「!!!!!!!!!!」

何で!?! 僕の名前が……この人は僕の何を見たって言うんだ。

「そうね、じゃあ最後の質問ね。一度天界に連れて来られた子供はどうなるの?」

「そうだな……一度連れてきたら変更はできねえな。勿論、人間界へ返す事も……」

天界? 人間界? この人たちは何を言っているんだ。帰ることができない? そんな……僕はついさっきまで学校に居たのに何でこんな所に

「あ、あの」

僕は恐る恐る声をかけてみる。

「ん? 何よ」

女性の方が振り向いた。

「ここは一体何処なんですか？僕はさっきまで学校に居たのに」

できることなら今すぐ帰りたい……すると女性の方がため息をついた。

「はあゝゴメンね。そこにいる『馬鹿！』が間違って君を連れてきちゃったのよね。」

あ、あたしの名前はシュレイナでこいつはクロード」

シュレイナと名乗る女性はクロードという人を何度も蹴っていた。

「さっきも言ったけど君にはある事をしてもらうまで人間界には帰れないから」

「……ある事って？」

「そうね、まずこの世界の名はファリツサ。ここで年に一度行われる魔法使いウィザード・ストウラゴの闘いってのがあるの。あなたみたいな人間界の子供達がウィザードって言う魔法使いになって闘ってもらわ」

僕が……魔法使いに！？

僕が……魔法使いに!?(後書き)

シュレイナやクロードの外見の詳細はプロログで紹介しているの
でここでは省かせていただきました。忘れてしまった方は、お手数
ですがプロログをもう一度見てください!次回からは闘いのルー
ル説明が入るのでセリフばかりになるかもしれません(汗)感想待
ってます!!

っていうか負けるのが嫌いなよ!!

僕が魔法使いに?……そんなのなれるはず無いよ。だって僕は普通の人間なんだから。

「その闘いのルールなんだけど、毎年変わってるのよね。去年のは確かこのファリッサにある『藍色の玉を何個か持って帰ってくる』だったかな」

シュレイナが説明を終えると一つの疑問が生まれた。

「えっと、玉を集めるだけなのに何で『闘い』なんですか?」

「あんたも鈍いわね。さっきも言ったけど参加者は他にもいるのよ? なら必然的に奪い合いになるとは思わないの?」

シュレイナが呆れたように言う。

「それって何人くらいの人が……」

「そうね、ざっと100人以上はいると思うわ。その全てがあんたの敵よ!」

「ひゃ、100人!？」

一瞬気が遠くなりそうになった。

「そつ、しかも闘いは1度じゃないのよ。ルールは毎年変わるけど唯一変わらないこと。それは二回戦は一回戦の3分の1しか残れないの。残りは脱落よ。」

そんな、ただでさえ敵が多いのに、半分も残らないなんて。

「その、脱落した人はどうなるんですか？」

きつとひどい目にあうんだろうか？まさか負けたら死ぬなんて事は……

「人間界へ戻されるわ、記憶を抜かれてね」

「……え？」

光が見えたような気がした。そうだ、わざと負ければすぐにもとの

世界へ…………

「言っとくけど！わざと負けたら承知しないからね！」

帰れそうも無いかな。

「あたしは絶対負けられないの！っていうか負けるのが嫌いなものよ！！」

何その個人的な理由！？

「無理ですよ！僕が闘うなんて」

「そんなのやる前から、負けを認める奴があるか！」

シュレイナがすごく怒ってる。何でそんなに必死に？

「いやーシュレイナ、今回はホントにお前でもダメかもしれないぞ？」

「何だよ！？」

クロードの言葉に睨み返すシュレイナ。

「ごたごたしてて確認してなかったが、この悟ってやつ 능력値を見てみる」

シュレイナが僕を見る。そしてしばらく見た後に愕然とした。

「そんな……体力45・精神力40・知力40なんて……何で全て平均以下なのよ!？」

そう叫んだシュレイナの目は若干涙目だ。体力や知力って僕 능력だろうか。自分でも思っていたことだけどやっぱり低いなあ。

「ふんっ! まあいいわ。ちょうどいいハンデじゃない! このくらいの逆境、乗り越えなければ認めてくれないものね!？」

シュレイナが開き直った。認める? 一体誰に認めてもらうんだろう。

「ところでさ、えっと悟君だっけ? あんた特技とかはあるの?」

特技……特技かあ、強いて言うなら。

「こ、コンロールがいい事しか……」

その言葉にシュレイナの目が見開いた。何かあったんだろうか？

「へーコントロール。そう、じゃあ試しにこの小石を湖の上に浮いている葉っぱにぶつけてみなさい」

そう言うど僕にその辺にあった小石を渡した。あの葉っぱか……できなくはないかな。

小石を葉っぱめがけて投げてみる。小石は吸い込まれるように葉っぱに当たった。

「すごっ！」

クロードが思わず声を出す。そんなにすごいことなのかなあ。

「ほ〜。なるほどね」

シュレイナがニヤリと笑った。

「あんがい、イケるかもね」

不意にシュレイナがそんな事を言った。

っというか負けるのが嫌いなよ!! (後書き)

悟の能力値とそれを補うかもしれないその特技。だんだんクロードのセリフが少なくなっているような気がします (笑) さあ次はいよいよ魔法ができてます! 皆さんが思ってるような魔法でしょうか? あまり期待はしないで下さい (汗)

感想待ってます!!

……大笑いしながら。

その後もシュレイナは何度か僕のコントロールを試していた。そんな時クロードがのんきな口調で言った。

「シュレイナ、後5分くらいだから俺は先に行くぞ？」

そう言って、クロードは立ち上がり呪文を唱えると足元から風が現れクロードを包み込んだ。

「ほんじゃ、先に行くぞ」

そしてものすごい速さでクロードは言ってしまい見えなくなった。

「まったくもう！何でいつもあたしより先に行くのよ！？ほら、あんたもボウツとしてないで行くわよ！」

そう言うとシュレイナは僕の腕を掴みさつきクロードが言っていた呪文を唱え始めた。

「大いなる風の下部よ『汝』なんじ我を目的の地へ導きたまえ！」

するとまた、足元から風が現れ僕ら2人を包み込んだ。

「うわわわわ！ちょっと！」

僕は何がなんだかわからなかった。

「ちょっと暴れないでよ！」

僕にはシュレイナの声は聞こえてなかった。そしてシュレイナが小型ハンマーを取り出すと……

「暴れるな！！！」

ゴッ！！

「……よし」

そのまま僕は目的地に着くまで気を失っていた。

（場面変わりとする会場）

目が覚めるとそこにはクロードやシュレイナのようなローブを纏まとった人が数え切れないほどいた。そしてよく見ると僕と同じくらいの子供も。

「お？ 気が付いたか」

「は、はい！」

どうやら僕はクロードの背中の上で眠っていたようだ。僕はとっさに背中から降りた。

「……あの」

僕が声をかけようとしたその瞬間、急に周りが暗くなった。

「いよいよ、始まるわね」

シュレイナがそんな事を言いながらある場所をジッと見つめている。他の人たちもだ。僕もそっちを見るといきなり火柱が立った。

「うわっ！」

僕以外の子供たちもみんな驚いているのに対しクロードたちは平然とその火柱を眺めていた。そしてその火柱の中から1人の老人が出てきた。ただの老人ではない。さまざまな装飾が施された立派な服に六芒星ろくぼうせいの模様が入ったマント、手元には長い杖を持っていた。

「えっと、シュ、シュレイナさん」

僕は初めてシュレイナの名前を呼んだやっぱり年上だし『さん付け』した方がいいかなあ

「あ、シュレイナでいいわよ、何？」

呼び捨てでいいのか、ちょっと勇気がいるなあ

「…………シュレイナ、あの人は誰？」

「あゝあの人は『グロツツ・ロベルト様』よ、200種以上の火・地・風・雷・水の魔法を使い中でも火の魔法は歴代のファリッサの王で最も強いと言われているの。毎年この魔法使いウィザード・ストウラゴの闘いの開会の儀で派手な魔法で出てくるのよ」

「ああ、確か去年はあそこに笑いながら雷に乗って来たっけな」

シュレイナの説明にクロードが補足する。そしてグロッツ様が喋りだした。

「あゝ皆の者よくぞ集まってくれた。そして選ばれし子供たちよ、慌てる事はない。すぐにパートナーと仲良くなれるじやろう。さて、今回は120名の子供たちに参加してもらおうわけじやが、まずはルールを説明する前に先ほど渡された箱があるじやろう、それを開けてみなさい」

グロッツ様がそいうと周りの人は手に持っていた赤い箱を開けた。勿論シュレイナも。

「その中に入っている石はわしが自ら用意した『火の石』じや。それを3つ集めて二回戦の会場へ来た40組が勝ちとなる。勿論、闘って石を奪い合うのじやが、今ではない。明日の正午からじや。それまで準備をしたり己を鍛えるのも良いじやろう、では諸君の健闘を祈る」

そう言い終えるとグロッツ様の周りを風が包み込んだがさっきのシュレイナの様な小さい物ではなく竜巻だった。その竜巻に飛ばされそうになっている人もいたが、グロッツ様は竜巻とともに天高く舞い上がって言った。

「あっはっはっはっは」

………大笑いしながら。

「本っ当に派手な人だねえ」

シュレイナは頭に手をやり呆れながら会場を出て行こうとしたので僕とクロードも後につづいた。

……大笑いしながら。(後書き)

グロツツ様はとても陽気なおじさんです(笑)だいたい強い人ってどこか楽しそうな感じがしますね。わたし個人の意見ですが……次回シュレイナの秘密に迫っていきたいと思います!感想待ってます!!

そんな額は大したことない

シュレイナを先頭に歩いているとクロードがシュレイナに問いかけた。

「おいシュレイナ、これから何処に行くんだ？」

「んーそうね。とりあえず悟の魔服でも買いに行きましょう」

また新しい単語が出てきた。魔服？やっぱ魔法使いの服のことかな。

「悟、魔服ってのはな、闘いでは重要な役割を持つてんだ。いろんな魔服があつてな、防御を高めるものや、使用者の魔力を上げたりもする。中には属性によってその魔法を拒絶するものもあるんだ」

クロードが僕に説明してしてくれた。なんかこの辺はゲームでも一緒なんだあ。

「さあ着いたわよ！中に入りましょ」

見るとそこには周りの店より遥かに大きい魔服の店だった。

「シュレイナ、こんな大きな店で……僕お金なんて持ってないよ？」

そう言うときシュレイナは平気な顔で応えた。

「誰が、あんたに買えって言うのよ。お金なら問題無いわ」

そう言ってシュレイナは店に入ってしまった。僕もクロードと店に入る。

中には数え切れないほどの魔服があり、その種類は様々だった。シュレイナたちが着ているローブや甲冑タイプなどいっぱいあった。

「んーそうねー。なかなかいいのが無いわねー」

シュレイナが店内を見回して魔服を選んでいる。僕にはどれも同じように見えるのに……そんなに違うのかな。シュレイナがさらに奥へ行き見えなくなったところで声がした。

「そうね、これが良いかしら」

僕もそっちへ行くとそこにはガラスのようなケースの中に黒いローブが飾られていた。見た目は普通だけど大切に扱われているって事は……

「シュレイナ……これって」

「勿論あんたが着るのよ、すいませ〜ん！これ下さい！」

シュレイナが叫ぶと店の奥から人のよさそうなおばさんが出てきた。

「はいはい、お待たせしました。ってあんた！この魔服のことを言ってるのかい！？」

店のおばさんは目を丸くして問いかけた。

「他にどれがあるのよ。これが欲しいの！」

「けど、あんたねえ」

おばさんが考え込む。この魔服……一体いくらするんだろう。僕は恐る恐る聞いてみた

「この魔服って……ちなみにいくら位するんですか？」

「……………200万シュエルよ」

「!!!!!!!!!!」

に、200万!? 『シュエル』 ってのはたぶんこの世界の通貨だと思っうけど200万って。

ポンッ

僕が呆けているとクロードが僕の肩に手を置いた。

「安心しろ悟。シュレイナにそんな額は大したことない」

クロードの言葉どおりシュレイナは信じられない言葉を発した。

「な〜んだ。意外と安いよね」

その言葉に僕だけでなく店のおばさんも驚いていた。そしてシュレイナは持っていた赤い布製の袋から一枚の用紙を取り出した。

「これで良いかな？おばさん」

そこに置かれた用紙を見ておばさんは目を見開いた。

「まあ！『ロベルト家』のお嬢様でしたか！これは失礼しました」

ロベルト？それって確か……

「シュレイナ、君は一体……」

「事情は後で説明するわ。さっ早くこの魔服出してよ」

「かしこまりました！」

そう言うとおばさんは店の奥へ行き鍵を持ってきてケースを開けた。

「さあどうぞ」

「悟、受け取りなさい。あんたの魔服よ」

僕は言うとおりにするとおぼさんがわざわざ着せてくれた。

「あ、ありがとうございます」

思ったより軽い。しかも気のせいか力が溢れてきた。

「す、すごい」

「んじゃ。行きましようか」

そう言うときシュレイナはさっさと店を出て行ってしまった。

「俺らも行くぞ？」

僕とクロードも店を出てシュレイナの後を追った。騒がしかった店にはしばらく静けさが消えなかったらしい。

そんな額は大したことない（後書き）

みなさんもお気づきだとは思いますが、シュレイナはある人の孫です。

さあ次回は悟がいよいよ魔法を手にします。ご期待下さい！
感想待ってます！！

少しでも2人に近づきたい

少し歩いて僕らは町から離れた草原に着いた。

「よし、この辺でいいわね」

「シュレイナ……」

僕が早速質問しようとしたが。

「あゝちょっと待って。いろいろ聞きたいことはあると思うんだけど、まずは改めて自己紹介ね。あたしの名前は『シュレイナ・ロベルト』もう分かっているとと思うけど、グロツ様はあたしのおじいちゃんなの」

やっぱり、グロツ様と同じ苗字。だからお金もいっぱい持つてるんだ。

「ついでに、得意な魔法は『風』属性よ。あんたを連れて会場に行ったときの魔法も風の力なの。他の属性も大体できるんだけど、今は水の魔法を中心に使えるようにしてるわ」

シュレイナが説明を終えると今度はクロードが話し始めた。

「んで、俺の名前は『クロード・アーチェス』シュレイナとは、まあいとこみたいなもんだ。得意な魔法は『雷』だがあの風の魔法はシュレイナに教わったんだ」

一通り終わるとシュレイナが僕に向かった。

「それでさ、これからあたし達が悟に一つずつ魔法の力を分け与えるから。あんたは五属性のうち何の魔法がいい？」

僕は少し戸惑った、僕が魔法か……まったく実感がないや。でも慎重に選ばないと。

「一度決めたら、もう変えられないの？」

「え？そんな事はない……っていうか、消せないけど追加はできるわ。他の三属性も全部与えることはできるけど、悟の体もたないかもね。」

「体もたない？」

「そう、もともと魔力を持たない人間に無理やり魔力を与えるんだ。体に少しだけだが負荷がかかるって事なんだよ」

そうか、シュレイナやクロードみたいに天界の人たちは魔力がもともとあったから、平気なんだ。

「と、言うことでどうするの？ 悟、とりあえずあたし達が一個ずつ魔力を与えるから選びなさい、二つ以降はある程度の耐性ができてからよ」

「うん、わかった。じゃあシュレイナからは水を、クロードからは雷を教わりたい」

僕は2人の得意な魔法を選んだ。少しでも2人に近づきたい。そんな気持ちがいつの間にかあった。

「わかったわ。じゃあまずあたしからいくわね。クロード、離れてて！」

シュレイナがそう言うのとクロードは10メートルくらいその場から離れてシュレイナは僕の前に立ち両手を僕に向かって突き出した。

「シュレイナ!？」

「いくわよ!……すう」

シュレイナは軽く息を吸うと全身に力を入れた。

「ハアアアアアアアア〜!」

シュレイナが叫ぶと彼女の周りに青い光が出てきてそれは徐々に小さく丸くなっていく、やがてシュレイナの手元には青く光る玉ができた。それを僕の体の中に押し込んだ。

「うっ!」

体の中に何かが入ってくる感じだ。少し気分が悪くなった。

「ふう〜これで悟は水の力を使えるようになったわ」

「え!?! たったこれだけで、僕にも魔法が?」

「まだ早いわよ! まずは自分の手から水が出るのをイメージしなさい」

僕は言われたとおりにしてみた。すると手から蛇口をひねったように水が出た。

「おお」

イメージをやめると自然と水は止まった。

「それが水の力よ。その力をよく理解し徐々に強く出したり弱く出したりして使いこなせてから魔法を教えるのよ」

「うん、わかった」

「おしっ、じゃあ次は俺だな。悟、いくぞ」

こうして、僕の中には水と雷の二つの属性が備わった。

少しでも2人に近づきたい（後書き）

悟がようやく魔法の力を手にしました。次回は悟がいろいろやってくれちゃいます。お楽しみに！感想待ってます！！

現にここに存在してるじゃない

「それじゃ早速、力の調節をしてみましようか。悟、その辺にに向かって右手に力を入れてみなさい。水が勢いよく出るから、そこから力を抜いたり入れたりするの」

「よし……………行け！」

僕は右手に力を込めてみた。すると……………

ドバアアアアアン！！！！

「水道管が破裂したように手の平からものすごい量の水が出てきた。

「うわあああ！」

「ちょ、ちょっと悟！何やってんのよ！？まず落ち着いて、早く力を抜きなさい！」

僕は驚きすぎて手を振り払った。しばらくするとシュレイナの落ちて着けと言う声が聞こえて僕は静まり水も止まった。

「ハア、ハア……」

何だったんだろう今の。

「ちょっと悟、どうしてくれるのよ!? あんたのせいですぶ濡れじゃない」

シュレイナもクロードもすっかり濡れてしまった。

「それよりもシュレイナ、さっきの悟の水の量だが」

「ええ、悟が力を込めすぎても、あんなに出るはずが無い。それに悟は他の人間に比べて能力値が平均以下なのよ? それなのに」

シュレイナとクロードが考え込んでいる。僕には何がなんだか。そんな時シュレイナが閃いたようにクロードに問いかけた。

「あ、クロード、悟の『魔力』はちゃんと見たの?」

「ああ、そう言えば見てなかったな、けど魔力って三つの能力値に比例するんじゃないのか?」

あれ？人間って魔力を持たないんじゃない？…僕の気持ちを察してくれ
たのかシュレイナが応えてくれた。

「言い忘れてたけど、人間に魔力はまったく無いわけじゃないの。
その人の潜在能力みたいなものよ、普段は眠ってるけどその力をこ
の世界にすることで引き出してくれるのよ」

そうか、でも僕の魔力って一体。

「けど悟の魔力って………」

シュレイナが僕のほうを見て静止した。

「どうしたの？シュレイナ。僕の頭の上に何があるの？」

シュレイナが震えた声でかすかに口にした。

「そんな…ありえない。こんな人間が何で！？」

「どうした？悟の魔力はいくつだったんだ？」

クロードが尋ねるとシュレイナはまた震えた声で応えた。

「に、250」

その言葉に立っていたクロードがしりもちをついた。

「な、何の冗談だよそれ？ファリッサ最強でお前のじいさんのグロツ様だって200なんだぞ！？」

グロツ様が200？それで…僕が250。何かの間違えだよね？

「あ、あたしだって、こんな人間初めて見るわよ！天界人よりも魔力が高い人間なんて…あ、でも」

シュレイナが何かを考えこんで思い出そうとしている。

「わかったわ！悟の魔力が異常に高いのは、他の能力値が異常に低いからよ！何百年も前の話だけど過去にそんな話があったのを聞いたことがあるわ。己の魔力に他の能力値を吸われて異常に高い魔力を持った天界人がいたのを」

「それが、人間にもあるって言うのか？」

「現にここに存在してるじゃない、荒川 悟という人間が」

「じゃあ他の人間はどうなるんだよ？能力値が低い奴はみんな魔力が高いって言うのか？」

「多分、悟だけが特別なよ。これで分かったわ。そして確信したわ」

シュレイナがいつの間にか頼もしいほどに笑っていた。

「なんだよ？確信って」

「あたし達は確実に勝てる！！」

その言葉にクロードも喜びを隠し切れなかった。小さくガッツポーズをしていた。けどこの2人はまだ気付いていなかった、もちろん僕自身も。その魔力に魅了されてあることを忘れていた。

現にここに存在してるじゃない（後書き）

なんだか回を増すごとに悟のセリフが少なくなっているような気がします（汗）

悟は基本におとなしい設定ですからね。次はもっと増やそうと思います。

感想待ってます！！

ま、そうなるわな

「それじゃあ試しに、あたしが使える水の上級魔法を教えるわ」

「え、いきなり上級なんて無理だよ」

魔力がすごいのは分かったけど……まだ基本も分からないのに。

「何言ってるのよ！あんたの魔力はものすごいんだから、それを活かそうとは思わないの？」

「そうだけど〜」

「じゃあまずあたしがやって見せるから、一回で覚えてね。結構体力使うんだから」

「わかった」

シュレイナは軽く深呼吸すると呪文を唱えた。

「大いなる水の下部よ『汝』^{なんじ}その姿を神聖なる龍の姿に変えここに

降臨せよ！水龍メルガ・ポセイドン！」

そう叫ぶとシュレイナの手のひらからさっきの僕のように大量の水がした。けどその水は徐々に形を変えていき、水が収まるとシュレイナの横には3メートルほどの水の龍が現れた。

「呼んだかい？シュレイナ」

「じゃ、喋った！？」

「珍しくもないわよ。メルガ・ポセイドンってのはこの子の名前よ。あたしは『メルガ』って呼んでるけどね」

「敵はいないみたいだけど、どうして僕を呼んだんだい？」

「あたしの魔法をその悟に教えるためよ。もう戻っていいわよ」

メルガが僕のほうを見た。

「悟……人間か、ちょっとシュレイナ、悟と話があるからいいかな？」

「別に良いわよ？」

するとメルガがシュレイナを離れて僕のほうにやってきた。そして小さな声で

「おいコラ人間。シュレイナに手え出そうとしたら容赦しないからな」

「は、はい！」

すごく怖い……シュレイナとの対応が違いすぎる。

「どうしたのよメルガ」

シュレイナが声をかけてくれた。

「なんでもないよシュレイナ、今戻るから」

そう言ってシュレイナのところへ戻ろうとする瞬間に僕の方をシュレイナからは見えないように思いつき睨んできた。そしてシュレイナの手の中へ吸い込まれるように消えた。

「どうしたのよ悟。怖いものでも見たような顔して」

「べ、別に、なんとも無いよ！それよりシュレイナ。メルガっていつも暴れたりはしないの？」

「暴れる？あの子に限ってそれは無いわ。確かに闘うときは強いけど、あたしにはとっても従順よ。ペットみたいなモンよ」

「そ、そう」

（シュレイナは知らないんだ。ホントのメルガを……言わないでおこう）そう心に決めた。

「じゃあ悟、あんたもやってみなさい。あ、そうそう『降臨せよ』まででいいから。最初は召喚して契約を結びその名前を決めるの」

「わかった、……ふう」

僕もシュレイナに習って深呼吸をしてから呪文を唱えた。

「お、大いなる水の下部よ『汝』その姿を神聖なる龍の姿に変えここに降臨せよ！」

そう叫ぶと、僕の手のひらからまた大量の水が出てきた。そして徐々にその姿を龍の形に変えていこうとしたそのとき。

バアアアアン！！

その水が弾けとび八方に散った。

「え！？何ですよ？何で水龍がでないの？呪文はちゃんとあったのに」

「いや、ちゃんと水龍なら出てるぞ。そこに」

うろたえるシュレイナにクロードが僕の手を指差して言った。そこを見つめると

「ふゝ……ん？うわっでっか！何だよお前ら！？巨人に召喚されたのか？俺は」

手のひらサイズの小さい水龍がいた。

「・・・はい？」

僕とシュレイナの目が点になっているのがわかった。

「俺もついさっき、気付いたんだがなシュレイナ、悟には魔力はあるが他の能力値がかなり低い。つまりそれに応じた魔法じゃないとダメになるって事だ」

「って言うことは、いくら魔力が多くても強い魔法はできないって事？」

「ま、そうなるわな」

「「……………はあゝ」」

シュレイナと僕は同時にため息がでた。

「おい！一体どうなってるんだよ！？説明しろ！」

そんな小さい水龍だけが僕の手の上で叫んでいた。

ま、そうなるわな（後書き）

やっぱり悟君はダメみたいでしたね。水龍やそのほかの召喚魔法たちにはいろいろ個性を入れてみたいと思います。またいろんな召喚魔法がでてくると思うのでお楽しみに！感想待ってます！！

……おやすみね、悟

「つまりあれか？その人間がこの俺を召喚したはいいが、能力値が低すぎるから不完全な俺が出ちまったってことか」

僕の水龍がシュレイナの説明を聞いて納得したようだ。

「んなこと納得いくかあああ！！」

……そうでもなかった。

「お前らなあどうしてくれんだ！特にシュレイナさんよお。あんた相当な魔法の使い手なんだろ？何でこんなことになったんだよ」

シュレイナのことをこの水龍は知ってた。そんなに有名なのかな。シュレイナも自分の名前を呼ばれて驚いていた。

「なんであたしの名前知ってんのよ」

「召喚獣の特に水龍の中では有名だぜあんた。メルガがあんたのこ
とばっか自慢してるからな」

「あの子がねえ。ま、当然よね！」

シュレイナが勝ち誇ったような感じで言った。

「とにかくな、召喚されちゃったモンはしょうがねえとして、早く俺に名前をつけてくれ」

名前かあシュレイナはメルガだけど、どうしよう……。

「お前の能力値じゃあそう長くは居られないからな。早く決めてくれ！」

「え、そんなのいきなり言われても」

「おい、もう行っちゃまうぞ！」

水龍の姿が徐々にただの水に戻ろうとしていた。

「ええっと、じゃあ……あ、アシュロン！」

僕はとっさに以前ゲームでつけたキャラの名前を言ってしまった。

「アシュロンか、悪くねえな。んじゃあな、悟」

そう言うアシュロンは僕の手の中へ消えてしまった。

「は〜とにかく、悟には初級呪文から教えるしかないわね」

シュレイナがまたため息をつきながら言った。

「いいんじゃないか？悟にはそれを補う魔力があるだろ、それで一回戦は楽勝だよ」

「それもそうね、じゃあ今から悟に水と雷の初級呪文をあたしとクロードで5つずつ教えるからあんたも早く使えるように努力しなさいよ!？」

「うん、わかった」

こうして日が暮れるまで僕は10個の魔法を必死になって使いこなせるように何度も練習した。こんなになるまで何かをするなんて初めてだなあ。すごく疲れた。

「大体こんなもんね、今日は帰って休みましょ。すぐ近くに支給された宿があるから、少し小さめだけどね」

そう言うときシュレイナは歩き始めた。

そんな中、悟たちがさつきまで居たところに黒い煙のようなものが現れ一人の少年の形になった。

『あの子が悟君ですか……なかなか面白い子だ。僕の計画にピッタリかもしれない、そしてもう一人もね……フフ』

そしてまた煙のように消えていったが悟たちは気付いてはいなかった。

「場面変わり悟たちの宿へ」

「さあ付いたわよ！中に入って」

そこには木でできたログハウスのような宿があった。

「シュレイナ、この宿ってどうやってできてるの？」

「ああこれ？多分グロッツ様の部下達が魔法で造ったんじゃない？『地』の中級魔法に地面から植物の壁を出す魔法があるから」

魔法ってこんなものまで造れるんだ、ホントに何でもできるんだなあ。

ドアを開けると中もほとんど木でできており、机や椅子がありさらに奥の部屋へ行くとベッドまであった。そして窓際には……シュレイナの顔が描かれた絵？

「あゝおじいちゃんったらもう！ベッドはうれしいけどこういうものは置かないでよ！」

そういうとシュレイナはその絵をはがし丸めて捨ててしまった。

「相変わらずだなグロッツ様は」

「本っ当に毎年、ベッドがあるのはうれしいんだけど……絵はやめてって言うてるのに」

「愛されてるじゃねえかシュレイナ」

クロードが笑いながらシュレイナをからかっている。僕はベッドの上に座ると急に眠気が襲ってきた。

「ったくもう、あれ？悟……もう寝ちゃったのね」

「このまま寝かしといてやろうぜ。悟なりに頑張ったんだから」

「……………そうね。明日はもっと過酷になると思うし。まあ悟なら自前の魔力でどうにでもなるでしょ」

「それもそうだな。んじゃ明日の作戦でもたてるとするか」

「あたしもそっち行くわ……おやすみね、悟」

そういうとシュレイナは悟の体にかぶせて部屋を出て行った。

……おやすみね、悟（後書き）

いろいろ詰め込みすぎましたね（汗）悟の召喚魔法に、新たな敵、グロツツ様の孫愛や（笑）シュレイナの優しい一面など。シュレイナは『ツンデレ』な設定にしてるんですが、どうでしょうか？ 次回
はまた悟君がやってくれちゃいます！
感想待ってます！！

絶対約束する！

次の日、一回戦『火の石争奪戦』が始まる1時間前。

「それじゃあ最後の確認よ。あたし達が教えた十個の魔法をそれぞれ出してみて。魔力は最小限でね、まずは水の第一魔法よ」

「わかった」

いくら初級魔法でも僕が使うと全ての魔法の規模が上がってしまう。だから今は最小限だ。

「水砲！^{クレウス}」

そう叫ぶと僕の右手を出てきた水が包み込み小さな大砲の形になった。そこからバスケットボールくらいの水の玉が発射され遠くにある木を破壊した。

ちなみにシュレイナや他の魔法使い達のクレウスは手全体ではなく指一本を包み、そこからビー玉くらいの水の玉を発射するらしいが僕は最小限の魔力でこれだった。一体全力を出すとどうなるんだろう。

「相変わらず悟のクレウスは別格ね。初めて使ったときは魔力半分であれだったけど、今は最小限なんでしょ？特訓の成果って奴ね！」

シュレイナが遠くにある粉々の木を眺めながら関心している。

「じゃあ次は雷の第一魔法だ。そうだなあ、あそこにある岩でいいだろう。狙ってみな」

僕は200メートルくらい先の小さな岩（遠くにあるから小さく見えるだけけど）に狙いを定めた。これくらいなら簡単に狙える。

「よし、^{スパレド}雷矢！」

呪文を唱え2秒くらいすると遠くにある岩が砕け散った。スパレドは指先から雷の粒をだして相手に向かって打つ呪文だが今回も同じく他の魔法使いが使うスパレドはもっと遅い。クロードに見せてもらったが十分に目で追える速さだった。さらに岩が砕けるのではなくヒビが入る程度の威力しかない。

「スパレドは不意打ちに使う奴がほとんどだが、悟の速さなら直接相手に向けても使えるな。しかも悟のコントロールなら遠くの相手

でも外す事は無い」

今回はこのスパレドを主に使っていくらしい。人数が多い分一人一人相手にしていたらすぐに時間切れになってしまう。ここで僕のコントロールが一番に試される所だ。

「次！水の第二魔法」

「うん」

後の8つは後の闘いでネタバレ防止のため書くため省きます。

「OK。この十個の魔法があれば万が一でも一回戦で負けることは無いわね。でもくれぐれも力はセーブしなさいよ？あんただって自分の手で人の人生を終わらせたくはないでしょ？」

遠まわしには言ってるがこれは僕が誤って力を出しすぎたらその人を……考えたくも無い。絶対に力をセーブすることは忘れちゃダメだ。

「わかった。絶対約束する！」

「よしっ！一回戦まで後10分くらいだからスタート地点へ行きましょうか」

そして10分後、ついに一回戦が始まる花火が上がった。目の前には大きな壁がドームのようにありてっぺんからは木々が見えている。ここは大きな森らしい。そして僕らはちょうど人が通れるくらいの穴が開いたところにいた、ここが僕らのスタート地点らしい。

花火に見とれているとクロードが僕の耳に囁いた。

「悟…構えろ」

「え!？」

僕はその意味がよく理解できなかった。構えろって一体………暫くすると僕もようやくその意味が分かった。僕らはすでに敵に囲まれていた。

絶対約束する！（後書き）

悟が使うクレウスの形はぶっちゃけて言うところ○○○んの○気砲みたいな形です。そしてシュレイナたちのはそのピストル版です。

（笑）そこから水の玉が発射されるものだと思っていてください。悟君の活躍はまだまた続きます！

感想待ってます！！

早速潰さなくちゃいけないなんて

僕らを囲んでいたのは鈍器や刃物を持った人たちが数十人いた。何で僕らだけこんな目に……するとシュレイナが呆れたように言った。

「はー今年もやっぱり来たか、懲りない人たちね」

こんな状況でも何でそんな悠長なことを言っているんだ？

「シュレイナ、今年もって？」

「え？ ああ。 いや困ったもんよねーあたしが初めてこの闘いにエントリーしたのが5年前でその年も次の年も優勝したの。そして3年目から始まるときはいつもこう！」

3年前から？ でも何で僕達に妨害を。

「つまりな悟。他のエントリー者が金でこいつら雇って俺達の邪魔をするんだよ。俺は初めて参加するが、まさかこんなにも来るとはな」

クロードが説明をしてくれる。そうかこの人たちはみんな雇われて

僕達を。

「でも、だいたいいつも襲ってくるのは、悪い事して魔法の許可を一時停止された人たちだから、魔法は使ってこないの。だからいつもは適当に目くらましの魔法とか使って逃げてるんだけど……今回はその必要は無いわよ。ついでにもう二度とこんなことさせないようにしなさい」

シュレイナがニツツと笑った。あ、なるほど。だからシュレイナはあの時……

それは昨日の魔法を教わるときにシュレイナが僕に言ったことだ。

「雷の第二魔法だけど、多分スタートしてからいきなり使うと思うから、十分に力の調節を覚えておきなさい」

あの意味が今やっとわかった。

「悟、分かっているわね？ 雷の第二魔法。威力は10分の1で」

僕は左手を地面の下につけて呪文のを唱えた。

スファレイド
「雷の網！」

そう叫ぶと僕の手のひらからでた電流は地面を這って八方にちり周りの人たちを痺れさせた。スファレイドはそもそも雷を帯びた手で相手に触れて一時的に動きを止める魔法だが僕のはというところ……

「悟のスファレイドは雷が手から溢れちゃうからねえ悟が抑えきれないから勝手に手を下に付いたら電流が八方に散ってくんだから、あたしも初めて使われたときは焦ったわよ。危うく感電するところだったわ」

そう偶然できた僕だけのスファレイドの使い方だった。そんな事を言っている間に周囲の人たちはみなちよっただけ感電して伸びていた。その中に一人だけ倒れたまま意識のある男がいた。その男の襟を掴んでシュレイナが言った。

「これで分かったでしょ？もう二度目は無いからね。わかった！？」

「……は…はい」ガクッ

そういうと男はそのまま気絶した。

「さくて気を取り直して出発しますかっ！」

そして僕は森の中へ入っていった。

（森の中歩くこと10分ほど）

遠くから闘っている音や何かが爆発する音などが聞こえた。いよいよ本格的に始まったんだ。そんな所に一人の男の声が聞こえた。

「よおアーチェス、久しいな。お前は今年からの参加だってな」

上を見上げると木の葉が茂って見えないけど誰かいる。アーチェス
っているのは、クロードの事か。

「あんたは……バイザンか」

「ああそうだ。そんで下にいる2人が俺のチームだ」

木の後ろから出てきたのは20代前後の背の高い女性と、僕と同じ
か一つ上くらいの男の子だった。そして木の上から飛び降りてきた
男は女性と同じ年くらいだった。

「はーあんまし期待はしてなかったがあの人数にこの速さで無傷とはな。まっ並みの魔法使いなら中級魔法くらい使えば簡単に倒せる人数だしな」

さっきの襲ってきた人たちはこの人が雇ったのか。すると女性のほうが愚痴を言い始めた。

「まったく使えないわね。だから魔法を使えるやつを雇って言ったのよ。あ、紹介が遅れたわね。私はシェリア。そして私達のパートナーの『瑞村^{みずむら} 耕輔^{こうすけ}』よ」

そう言い男の子の背中を軽く叩くとその子があわてたように挨拶をした。

「よ、よろしくお願いします！お、お手柔らかに」

そう言うと瑞村は震えながら手を差し出してきた。握手？やっぱり他の連れて来られた子共達も慣れない世界に緊張しているようだ。僕も手を差し出すと笑いながら

「よろしく！」と言った次の瞬間。

「悟！ダメ！！」

シュレイナの叫び声が聞こえた。そして瑞村もさっきまでとうって変わって…

「せっかく同じ世界の人と知り会えたのに……早速潰さなくちゃいけないなんて……悪いね」

気が付くと僕のローブの中に瑞村の手があった。

「え？」

そして彼が呪文を唱えた。

『フェルシ
突風！』

早速潰さなくちゃいけないなんて（後書き）

やっぱり悟は強いけど弱いところもありますね。でもそこが彼のいいところなんです！主人公には欠点があるほうが私はいいと思いますね。皆さんはどうでしょうか？完璧最強or欠点まるけ感想待ってます！！

悟が少しだけ怖く見えた

『目覚めよ…悟』

暗闇で声がする。誰だろう、僕に話しかけるのは。どこかで聞いたことのある声だ。何故か懐かしく感じる。

何処までも続いている暗闇。そこで僕は一人だった。また声が聞こえる。

『私の…目覚めさせよ』

声が途切れる。僕は暗闇に向かって声を投げかけた。

「あなたは、誰なんですか？」

『……いずれ……分かる日が来るよ。さあ今こそ力を解放しなさい！』

その言葉を最後に声は聞こえなくなった。

「待ってよ！あなたは……誰！？」

暗闇に向かって走ると急に足が沈みだした。

「……え？」

そして僕の体をどんどん飲み込んでいく。

「…嫌だ、助けて！誰か！」

そしてついに視界が真っ暗になり気が遠くなった。

～ここからシュレイナ視点～

悟が瑞村って子に吹き飛ばされて木に頭をぶつけて気を失った。悟
ったらいきなり油断して。全員が敵って言ったじゃない。

「いきなりなんて卑怯じゃない！」

と、言いつつもこの手の奴らは勝負に卑怯もクソも無いなんて言っ
て開き直るタイプの奴なのよねえ今更言ってもダメか。

「騙されるその子が悪いんじゃないのか？知り合いでもないのに近づいたらいくらなんでも攻撃するくらい分かるだろ」

確かにそれもそうよね。悟ってホントに馬鹿！

「さあ大人しく日の石、渡しなさいよ。ここからは私達も戦えるんだから、そっちが不利になるのよ」

今回の闘いのルールでは天界人は天界人同士。人間は人間同士でしか戦えないんだけど。どっちかの人間または天界人が気絶か戦闘不能になったらどちらかの加勢に行ってもいいルールになってる。

「だから何よ！あんた達なんてこのあたし一人でも十分すぎるわ！優勝常連者なめんじゃないわよ！」

実際あたしは負ける気がしない。多少はダメージを負うかもしれないけど、小さい頃から王家で魔法を教わったあたしならこんな相手に負けない、負けられないのよ！

「それじゃあ行くぜ？」

バイザンが臨戦態勢に入った。来る。

「あたしだってえ！」

相手に向かって走り出そうとしたそのとき。

「待つて、シュレイナ」

とたんに後ろを振り返る。悟？ 見ると悟が目を覚ましてこちらに歩いてきた。

「僕が、戦うよ」

「人間の方が戦えるならしゃーねえな。耕輔、行け」

バイザンがひとまず引いて代わりに瑞村が出てくる。

「何だ、また倒されたいのかい？」

瑞村は余裕の表情だった。悟、本当に戦えるの？

「悟、あんたもう大丈夫なの？」

「大丈夫だよシュレイナ。ゴメンね。すぐ終わるから」

「すぐってあんた……！」

悟があたしの横を通り過ぎるときに悟の表情を確認した。さっきまでの悟じゃない。確かに悟だけど……何かが違う。すごく冷たい目をしてる。どうしたのよ悟。

「ちょっと悟！」

あたしが飛び出そうとしたときにクロードに肩を掴まれた。

「今は…行かないほうがいい」

「どうしたのよクロード」

「まあ見てろって」

クロードが不適に微笑んだ。こんなクロードも初めて見る。そんな事をしてる間に悟が瑞村の近くまで来た。

「さっきはゴメンね、君があまりにも弱くってつい」

口では謝ってるけど全然そんなきが伝わってこない。それに対して悟は

「いいよ、僕も油断しすぎたみたいだし、ここからはちゃんとするから」

何よ悟、あんたそんな事いう奴じゃないでしょ？あたしには悟が少しだけ怖く見えた。

悟が少しだけ怖く見えた（後書き）

悟君が何かに目覚めちゃいましたね。書いてみてシュレイナがここ
まで動揺するのはちょっと違和感を感じます。次回は悟が悟じやな
くなります。

感想まっています！！

いっちょ行きますかっ！

「じゃあまた君をぶっ飛ばしてやるよ『フェルシ』！」

瑞村がまた悟にフェルシをぶつけようとするとう悟はいとも簡単にその風を避けた。あの動き、確実に今までの悟るじゃない。

「そのフェルシって魔法は相手に直接当てないと意味がないみたいだね」

「そ、それがどうしたんだ！まだ僕には他の魔法だって…」

瑞村が悟の反応にうろたえていると悟は更に瑞村をあおった。

「じゃあやってみなよその魔法を、僕は何も邪魔しないからさ」

「は？何言ってるんだよお前。調子に乗んなよ！『フェルカルス風牢』！」

呪文を唱えた瑞村の手から現れた。ダメだ！あれは避けないと。そう言っているうちに悟の周りを風が回転しながら包み込んだ。

「この魔法は捕われたら最後だ。出ようとするや鋭い風が触れた部分から切り裂いていくぞ。そうしなくてもこの風はそのうちお前を傷つけるけどな」

見ると悟を囲んでいる風の球体が徐々に小さくなっていく。マズイ、早く何とかしないと。……え？ 悟何してんのよ？

悟はゆっくりと左手を上げて風に触れようとした。ダメよ。いくらあんだでもそれは！

「大丈夫だよシュレイナ。それに魔力も弱めるし……『スパレド』」

「何？……うわ！」

悟が呪文を唱えた瞬間に瑞村の肩が撃ちぬかれた。嘘！？全然見えなかった。それ本当に魔力を弱めてるの？

撃ちぬかれた肩を必死で抑えてもがいている瑞村。集中力が切れたおかげで悟の周りの風が消えた。

「じゃあ今度はこっちから行くよ。…『クルセルド水鞭』」

それってたしか水の第二魔法。使用者の手を水が覆い長い鞭のように形状を変化させる魔法、やっぱり初級だから普通の人間界にあるような鞭になるけど悟のは……

「な、なんだよこの魔法。やめろ！はなせ！」

体全身を巻きつけるほどに大きくて長い。一度捕まってしまうばあとはこっちのもの。そのまま高いところに上げて落とせば普通の人間なら気を失う。

「いくよ。……それ！」

しかし悟はその腕をそのまま振り下ろし瑞村を地面へ叩き付けた。そんな悟がそんな事をするなんて。しかも一度や二度じゃなく…何度度も。

「や……やめてくれ。僕の負けでいいから」

瑞村はかなりのダメージを負いほとんど喋れない状態だった。そんな状態を見てか悟はつまらなそうに

「そろそろかな？」

瑞村を地面へと降ろし彼のそばまで行った。

「僕の負けだけど。けどバイザンとシエリアがやってくれる」

「まだ口が開けるんだね。じゃあトドメだ。」

「い、いやだ」

「さっき君は僕に中途半端な攻撃をしたから、今こうなってるんじゃないか、だから僕は君のようにはしない。雷の第四魔法……『スフォイル・』」

「ちょっと待ちなさいよ悟！ホントにその子死んじゃうじゃない！」

それだけは嫌だって言ってた悟がなんの躊躇もなくここまでするなんて。絶対悟じゃない。

「邪魔しないでよシュレイナ。あと少しなんだから。さあいくよ」

ここであたしが止めないと。悟は……もう。あたしはとっさに走り出し悟を捕まえてこっちを向かせた。

「やめなさいって……言ってるでしょ！」

（ここから悟の視点）

気が付くと目の前には涙目のシュレイナが僕の肩を掴んでいた……。痛っ。右の頬がじんじんする。

「こんなの、悟じゃない。どうしたのよ……グスッ」

「泣いてるの？シュレイナ」

シュレイナが泣くなんて。まだこの人とは会って少ししか経ってないけど、シュレイナが泣くなんて想像がつかなかった。

「なんで泣いてるの？」

「……悟？あなた、悟よね？」

おかしい質問をする。何でこんなことに。

「僕は悟だよ」

「何よ、最初にあったばかりの悟じゃない。ビックリさせないでよ！さっきまでのあんた、ホントに怖かった」

涙をぬぐいながらシュレイナがこたえる。さっきまで？それっていつの話だ？

「ったくいつまで泣いてんだ？シュレイナ」

そこへクロードがやってきた。

「敵はあと二人いるんだ。しっかり腰入れろって！」

そう言ってシュレイナの背中を軽く叩いた。それに反応するようにシュレイナが顔を上げた。

「そ、そうね、さっあんたはもういいから、そこにいなさい！」

シュレイナからもう涙は出てなかった。クロードともに立ち上がり敵に向かい直した。

「それじゃあ、いっちょ行きますかっ！」

いっちょ行きますかっ！（後書き）

悟君が暴走してシュレイナがそれを止める。この構図は最初に決めてあったのですが結構序盤で出してしまいました。（汗）でもなんだかい感じに出来たと思います。次回はシュレイナとクロードの活躍です！

感想待ってます！！

これが本当の魔法使いの戦いなんだ

シュレイナとクロードが僕の前に出て戦闘体勢にはいる。

「な、なんだよあの悟って人間は！あんな力があつたなんて」

「安心しなさい、悟はもう戦わないから。ここからはあたしたちが相手をしてやるわ！」

うろたえるバイザンにいつもの強気なシュレイナが前に出た。

「何よ！さっきはちょっと驚いたけど……それでもそれはその子の力。あなたたちだけなら怖くもないわ！」

シェリアが反抗するがその言葉には力がなかった。

「そんじゃあ、さっそいくぞシュレイナ」

「オーケー！」

「いくぞ！」

クロードの合図に四人が一気にその場から消えた。

「え？どこ行っただのシュレイナ！」

「すきあり！」

後ろから声がした。振り向くとバイザンが僕の後ろで右手を振り上げて魔法を放とうとしていた。

「ちょ、ちょっと待って!!！」

「お前はこっちだよ!!！」

すると少し離れたところからクロードが右手から火の玉を出してバイザンにぶつけようとした。が間一髪でバイザンは避けてそしてまた二人とも消えた。

「悟! あんた突っ立ってたら巻き添え食らうわよ。こっちきなさい」

シュレイナに腕を掴まれて茂みに放り込まれた。

「あんたはここにいなさい」

「ずいぶんと余裕ね、シュレイナ」

すると木の上からシェリアがシュレイナに向かって水の矢のようなものを何発も打ち込んできた。

「つく！……おりゃ！」

シュレイナの掛け声とともに右手から風のシールドが現れそれをはじいた。二人とも呪文を唱えてないのに魔法をつかった？これが本当の魔法使いの戦いなんだ。

しばらく見とれていると徐々に四人の姿が見えるようになってきた。いや正確にはバイザンとシェリアのスピードが落ちてきていたんだ。

そしてバイザンとシェリアが背中合わせになり姿を現した。

「つくそ！このままじゃやばい！」

「ここは逃げた方が……」

そういつているうちにシュレイナが空中に現れて

「スキあり！『水錠』！」
クレイル

両手から出した水を細く伸ばし二人に投げつけた。

「しまった！」

すると水は二人に巻きついて拘束した。

「あとは頼んだわよ、クロード」

「ああ、『炎輪』！」
ライク

クロードの手から炎の車輪が現れ徐々に大きくなっていく。

「避ける！シュレイナ！」

「わかってるわよ！悟、こっち」

シュレイナに引っぱられ更にその場から離れる。

「いっけー！！」

クロードの投げた炎の車輪は二人に直撃し小さな爆発が起こった。爆炎が消えるとそこには倒れている二人がいる。まさか……シュレイナが二人に近づくとバイザンが顔を上げた。よかった死んでない。

「さあ、火の石を出しなさい」

シュレイナが手を差し出す。

「……ちくしょう。……ほらよ持ってけ！」

バイザンが箱を投げ渡す。シュレイナがそれを受け取ると。

「よしっ！勝利！！」

そこへクロードが降りてくる。

「さあぼさつとしてねえで次ぎ行こうぜ！」

「何、あんたが仕切ってんのよ！あたしがリーダーでしょ？」

「リーダーとかいつ決めたんだよ？」

「たった今よ！」

「……ま、いっか。行こうぜ悟」

「う、うん！」

やっぱり凄いや、二人とも。

これが本当の魔法使いの戦いなんだ（後書き）

ちゃんとした戦いを書くのは初めてだったのですがどうでしたか？
どうしても自分のイメージしている戦いと読者の方のイメージが違
ってくると思うのですが、想像が難しい方はド○ゴン○ールのレベ
ルの高い肉弾戦に魔法が加わったものだと思ってください。衝撃波
だけ見えるようなあれです……長くなってしまいました。次回回は悟
君の修行に入ります。感想待ってます！！

一回戦を突破できる……よね

しばらく森を歩くと突然目の前の地面から巨大なモグラが出てきた。

「ギャオアアアア！」

どうやらこいつも僕を襲ってくるようだ。

「はぁーもう五体目だよシュレイナ」

僕もそろそろ疲れてきた。いくらすぐに倒せるからと言ってもう何度も出てこられたら嫌になる。

「何弱音吐いてんのよ！さっそとやっちゃいなさいよ」

「わかったよ。水の第三魔法『水の剣』クリルザン！」

この魔法は字の通り右手から水の剣を出す魔法だ。ここでも僕の魔法は常軌を逸脱していて、普通なら小刀程度の剣が僕のは身の丈ほどの剣になる。

「やゝと！」

二、三度切りつけると巨大モグラはその場に倒れた。

「ふう」

「ずいぶん慣れてきたわね、初めて会った時と比べたら大きな進歩よ。それも全部あんたの魔力のおかげね」

確かにこの世界になってから僕は少しずつだけ変わっている事が自分でもわかった。すぐに弱気にならずにまずはやってみたり、体力も付いた。

「んじゃ先を急ぐわよ！」

「えゝまだ行くの？ちょっと休もうよ」

「何言ってるのよ！一体誰のせいでこの巨大獣の巣で修行してると思ってるの？」

「そりゃゝまあ」

時は少し前にさかのぼる。僕らがバイザンたちを倒して先へ進む時だ。僕は自分に何があったかを全く覚えてなくて、シュレイナやクロードに聞いた。

「いったい僕に何があったの？ 気が付いたら瑞村君って子は倒れてるし、シュレイナは泣いてるし。説明してよ」

「それは、あんたがっ……」

シュレイナが言葉につまり黙り込む。

「クロード、僕に何があったの？」

「別に大した事じゃねえよ。お前が相手に吹っ飛ばされて強く頭を打ったから気を失ってただけだ。その間に俺たちで瑞村を倒して、悟を起こそうとしたがなかなか起きないからな、シュレイナが死んだんじゃないかって勘違いしたんだ。…なっ？」

クロードがシュレイナに振る。シュレイナは俯いてた顔を上げて。

「そ、そうなのよ！ ホントにビックリしたわよ。だから思いっきり頬を叩いたら悟が起きて安心したわ」

何かおかしい。二人とも何かを隠してるみたいだ。それに僕は覚え
ている、シュレイナのあの言葉を。

『さっきまでのあんた、ホントに怖かったっ』

あれは一体…………。

「とにかく次に敵とであった時しっかり戦えるように行くわよ！」

「え？行くってどこへ？」

シュレイナがニヤリと笑った。

「巨大獣の巣へ」

そしてそこでは様々な巨大獣が現れ、一番多かったのがさっき倒し
たモグラだった。そして現在に至る。

「じゃあ次は防御魔法ね。あたしが今からこの石ころを風の魔法に
乗せて飛ばすわ。それを防いでね」

シュレイナが手ごろな石を拾うと

「準備はいい？」

「いつでもいいよシュレイナ」

「行くわようシュレイナ様の剛速球を受けてみよ！ 『突風』^{フエルシ}」

シュレイナが野球選手の投球のモーションをとってから呪文を唱える。こういうサポートのような魔法の使い方も出来るんだあ。あの石が当たったら痛いじゃ済まないんだろうな。僕はそんなことを考えながら左手を前に出し呪文を唱えた。

『雷の盾！』^{スフェイル}

僕の目の前に黄色い円状のシールドが現れて飛んできた石を粉々にして跡形もなく消え去った。スフェイルは守ると言うよりは弾くと言ったほうがいいかもしれない。この雷のシールドは高速に回転しているため、触れたものを削っているんだ。ふつうならあの大きさの石なら弾いて違うところへ飛んでいくのをやっぱ僕のは回転数が多すぎて粉々になるらしい。

「うん。上出来ね！この調子で水も雷の魔法も完璧にするわよ！」

それから何体くらい倒しただろう。もうどんな敵が現れても大丈夫のはずだ。このまま行けば一回戦は突破できるだろう。洞窟を抜けてからまたしばらく歩くとクロードが叫びだした。

「あああ！！！」

「ど、どうしたのよいきなり大きな声出して」

「シュレイナ、時間があと三十分しかないぞ！」

「……………ええ！？」

このまま行けば一回戦を突破できる……………よね。

一回戦を突破できる……よね（後書き）

やっぱりそう簡単にはいきませんね。あとあと考えるとシュレイナは投球のフォームやらをどこで見たんでしょよね？ いろんな疑問などがあがるかもしれませんが長い目で見てあげてください。感想待ってます！！

この人を助けたい！

「何で言ってくれなかったのさ！一回戦のルールに制限時間内にたどり着かないと強制失格になるって」

僕たちはひたすらに走っていた。ゴールをめざして。

「だって毎年あたしは一番にゴールしてたから時間なんて気にしてなかったのよ！それにあんたの修行も必要だったし。あたしのせいじゃないわよっ！」

「おいお前ら、ケンカしてないでもっと速く走ってくれよ。このままだと間にあわねえぞ」

「わかってるよ！」

「わかってるわよ！」

二人の声が同時にクロードに向けられた。

修行のおかげで二つ目の火の石は簡単に手に入りそれでも制限時間は残り十分を切っていた。僕は二人のすぐ後ろを走っていたが、だんだん疲れてきた。そんなときにシュレイナが。

「んゝ悟もそろそろ限界に近いわね。クロード、悟をおぶって。あれをするわよ」

シュレイナが僕を気遣って何かするようだ。

「そうだな、この距離なら残ってる魔力でなんとかなりそうだ。悟、乗れ」

「うん」

僕はクロードの背中に乗ると二人が立ち止まりその場でしゃがみこんだ。

「え、どうしたの？」

「悟、魔力ってのはただ魔法を使うために消費するもんじゃないのよ。」

すると二人は陸上競技のクラウチングスタートのポーズをとり。

「魔力を……足へ」

次の瞬間二人は地面を蹴り加速した。

「うわっ！」

「振り落とされんなよ、悟」

高速道路で車の窓から顔を出したときに受ける風。まさしく僕は今そんな風を受けている。

「何でこんなに加速が……うわっ」

クロードがもう一度地面を蹴り更に加速した。

「それはな、俺たちは自分の魔力を体の一部に集中させてその部分を強化するんだ。ちよつとコツがいるがな」

「喋ってないでもっと加速するわよ！」

そう言うとシュレイナはもう一度地面を蹴りまた速くなった。

「もうそろそろだな」

「ねえクロード、一つ聞いていい？」

「ん？どうしたんだ」

「わざわざ走らなくてもあの時使った風の魔法で行けばもっと楽なんじゃないの？」

あの時と言うのはシュレイナたちが風を纏って会場にいった時の魔法だ。

「あゝあれな。あの魔法は上級魔法だからな、それ相応の魔力が必要なんだ。シュレイナはいけるかもしれないが、今の俺の魔力じゃ足りないんだ。俺もまだまだだな」

あの魔法も上級だったんだ。確かに水の上級魔法も長い呪文を言っただけ。

「そっかあ。あ、あれがゴール地点かな」

そこには高い塔のような円柱の屋根がとんがった建物が見えた。

「おうそうだな。もう時間ギリギリだ」

クロードが時計で確認する。門の前ではシュレイナが立っていて僕らも門の前に到着する。

「やっと着いたわね、じゃあみんなで門を開けるわよ。せいのっ」

『あの、ちょっと待ってください!』

門を開けようとした瞬間にどこからともなく声がする

「え、何、敵？」

僕らが振り向くとそこには金髪でショートヘアの青い目の女の子が立っていた。外国の人だろうか、それとも天界の人？

「何よあんた？」

シュレイナが前に出た。

「あ、あの別にあなたたちと戦うつもりはありません、時間が時間ですし……」

確かにあと十分ほどで僕らは強制失格になる時間だ。ここで戦ったたとえ片方が勝利したとしても時間切れになってしまう。じゃあ一体……

「も、もし火の石が3つ以上あるなら……一つ譲っていただけませんか？」

「「「???」」」

「自分が無理を言ってるのはわかってます！でも私たちにはもうこの方法しかなくて……でももう何人にも断られて」

その子はとても必死だった。でも何でこの子一人なんだろう。自分のパートナーは、とそこへこの子のパートナーらしき人が現れた。

「もういいのよ『アリシア』。今までも無理だったんだから今回は運が悪かったのよ、ごめんなさいねあなたち、私たちはもうここで失格だから先に行ってちょうだい」

その人はもう完全に諦めていた感じだった。運が悪かった？一体何があったんだろう。助けたいなあこの人たちを……あ、そういえば。

「悪いけど、あたしたちは3つしかもってないわ。せっかく会えたけどここでお別れね」

「待つてシュレイナ！確かあったよね、もう一つ火の石が」

「え！？本当ですか？」

「はい、今手元には無いですが、けどある場所は知っています。僕が今から……」

しかしそこへシュレイナの言葉が遮った。

「ダメよ悟っあんた自分が何言ってるかわかってるの？」

わかっている、その火の石を取りに行けば僕は確実に失格になる事だって。でも僕は……この人を助けたい！

この人を助けたい！（後書き）

ここで新キャラ登場です。そしてここでもまた悟君の優しさが悪い方向へ向かおうとしています。でもそういうキャラ……私は嫌いじゃないです。次回は悟とシュレインが活躍します！クロードはちょっとお休みです（笑）

感想待ってます！！

絶対に戻って来いよ

僕たちが最後の火の石を手に入れたとき、その相手はすでに二つ持っていてすなわち僕らの火の石は合計で四つになったんだけど、しばらく走ってから敵のいないところでシュレインが。

「四つあっても仕方ないわね。その辺に捨てておきましょう」

と言って言葉どおりその辺の茂みに捨ててしまったのだ。あの火の石を取りに行けばこの人を助けられる。

「わかってるの？ 悟、あの場所から短時間で戻ってこられたのはあたしたち天界人の力があつたからなのよ！ 今から行っても時間内に戻ってこられる保障は無いわ！」

「わかってる、でもやってみなきゃわからないよ！ 絶対に戻ってくるから！」

そう言い残して僕は森の中へ戻った。

「つとにもう絶対にわかってないわ。あたしも行くから、クロードはここで待ってて、間に合わなかったらあんた一人で先に行ってて」

「ああわかった」

そしてシュレイナも悟のあとを追った。そこへアリシアがクロードに話しかけた。

「本当にいいんでしょうか？ 悟さん……でしたっけ、私のために」

「行っちゃまったモンはしゃあねえよ悟はああいう奴なんだ、それよりあんた、これ持って先に行きな」

と言ってクロードはアリシアに火の石を投げ渡す。彼女はそれをあわてて受け取った。

「わわって、え？ これって」

「もし悟が間に合わなかったのためだ。行ってくれ、悟が間に合わなかったらあいつはきつと後悔するだろうからな」

アリシアは火の石をじつと見てから。

「あ、ありがとうございます！ 私、向こうで待ってますから！」

「ああそうしてくれ」

そしてアリシアとそのパートナーは扉の向こうへ行ってしまった。

「悟が間に合わなかったらシュレイナ怒るだろうないや、いや必ず怒るな。だから絶対に戻って来いよ、悟」

「悟たちの視点へ」

シュレイナとともに火の石を捨てた場所にたどり着いた僕は火の石を探していた。そんな僕をみてシュレイナは。

「ねえこの辺だよねシュレイナ」

「そうだけど……ホントにバカよねっ悟って」

「うっ」

自分でもわかってたけど。ここまでストレートに言われるとグサッと来るものがあった、けど。

「嫌なんだ、目の前に困っている人が居るのに助けられない自分が無力な自分が。でもこの世界に来てから少しづつだけど自信がもてたんだ。シュレイナやクロードのおかげだよ。だから今は人の役にいたいんだ！」

自分の世界にいる時の僕は困っている人が居ても何も出来なかった。いや、やろうとしなかったんだ。どうせ僕がやっても……という思いがありその一歩が踏み出せなかった。だから今は少しでも……

「はあわかったわよ。あたしも探すからあんたも全力で探しなさいよ！」

「ありがとう！シュレイナ」

そして探すこと五分くらいで火の石が見つかった。

「あつたよシュレイナ！早く、クロードたちの所へ戻ろうよ！まだ間に合うよね？」

「……無理よ」

「え？無理って、魔力を足に使う力があれば、間に合うはずじゃ」

「その魔力が無いのよ。それにあったとしても残りの時間が無いわ」

そ、そんな、ここまで来たのに。また僕は助けられないのか。この世界でも僕は…無力だ。

「だから、あんたの魔力を使うわ」

え、僕の魔力？

「右手を出しなさい」

「う、うん」

僕は言われたとおりにする。

「ちょっとした間だけだからね、それと……許してよね、おじいちゃん」

（おじいちゃん？それって）

そう言うとシュレイナは僕の手を握り呪文を唱えた。

「……………我はペトラルカの血を次ぐ者。今は亡き汝の力を我に授けたまえ。ウラヌス・メイリス・ペトラルカ」

その呪文を聞いた瞬間に僕は意識が遠のき気を失っていた。

「ロベルト家に代々伝わる魔力吸収の魔法よ本当は禁術なんだけど、ごめんね、悟の魔力は一日もあれば回復するだろうから少しの間だけ借りるわね。これであの魔法が使える。制御できるかは怪しいけど…やってみますか！」

シュレイナは呪文を唱えるとその場から消えた。

絶対に戻って来いよ（後書き）

活躍って程でも無かったですね（汗）本当は火の石を見つけてからバトル展開にしようと思ってたのですが、よく考えたら十分でいてバトツて戻るのは無理ですねということで、シュレイナの複線を張ることにしました。この魔法はのちのち登場したりしなかったり（笑）感想待ってます！！

あれ？何かおかしい

「まだなのかよ、あいつら」

残り時間が三分を切っておりさすがのクロードも焦り始めていた。
そんなとき、

「……っと、どいて〜！！！！」

目の前の森からシュレイナが飛び出してきた。しかも猛スピードで

「うわああああ！っち、しゃあねえな。地の魔法はあまり得意じゃないんだが……」

クロードは地面に手を付き呪文を唱えた。

ドルニス フェイム
『土壁・柔！』

するとクロードの目の前に地面から土が盛り上がり身の丈ほどの壁ができた。その壁は文字通り柔らかくなっておりシュレイナを怪我無く受け止める。

「ふうく助かったわ、クロード」

「助かったじゃねえよシュレイナ！、いきなり突っ込んで来やがって」

よく見るとシュレイナの背中に白い翼が見えたがすぐに消えてしまった。

「シュレイナ、まさかお前」

「そのまさかよ、やっとあの魔法を使うことができたの。全く制御できなかったけどね」

「それより、魔力はどうしたんだよ、今のお前じゃまだまだ足りないだろ？」

「悟の魔力をちょっと借りたの、ロベルト家秘伝の禁術でね」

（禁術って話には聞いていたが……無茶しやがって）

「とにかく行きましょ、ほらっ悟も起きなさい！」

シュレイナに担がれたまま悟が目を覚ました。

「ん、うゝん……シュレイナ、ここって」

「着いたわよ、ゴール地点に」

「え！？ホントに？本当に着いたんだ！あれ？アリシアさんは？」

「俺が持ってた日の石を渡して先に行ってもらったよ。万が一ってこともあるしな」

「はあ！？あんたね、あたしたちが間に合わなかったら先に行きなさいって言ったでしょ！何で渡してんのよっ？」

「まあ間に合ったんだからいいじゃねえか。悟もあの子を助けたかったんだろ？」

「うん、ありがとうクロード」

「まったく、みんなバカばかり！さあ悟も降りなさい。今度こそ、

みんなで扉を開くのよ」

「うん」

そして悟たちは目の前の扉を開き中へ入っていった。そして悟たちがいなくなった場所にまたあの黒い煙が現れ少年の姿になった。

『彼らはいったい何をしているんだろう。あんなの助けなければすぐに自分たちがゴールできたの言うのに……まだまだ天界人や人間にはわからないことばかりだ。それよりも悟君、君は僕の予想を遥かに超えてくれた人間だよ。早く彼と話がしてみたいな』

そう言ってまた煙のように消えてしまった。

く悟の視点へく

扉を開けると、そこは闘技場のような広場だった。そこには三人一組でのチームが……僕らを合わせて4チーム居た……あれ？何かおかしい。シュレイナもそれに気づいたようで僕に話しかけた。

「気づいた？参加したのは120チーム普通に行けば40チームが残るはずなんだけど……以上に少ないわね」

「きっと誰かが三つ集めた後に妨害でもしたんだろ？よくある事だ」

「それはあたしも考えたんだけど、それをしたとしても少なすぎるのよ、皆がみな妨害したとは考えにくいし」

「な〜んか今回は怪しいな、この中に必要以上に敵を倒していったやつがいるってことだ」

この中にそんな人が……一体。

あれ？何かおかしい（後書き）

ちよっといつもより短くなってしまったような気がしますね。他にアイディアが浮かばなかったです（汗）次回は少しでも時間を戻して久しぶりに登場のグロツツ様のからです。
感想まっけます！！

足音は聞えなかった

時は悟たちがゴールする少し前の事。自分の孫が一番に到着すると
言っていたグロッツ様は……

「おかしい、シュレイナは一体何をやっているのじゃ、このくらの
試練ならあの娘なら簡単に乗り越えられるはずじゃろうに……」

（まさかこの中にいる誰かにやられてしもうたのか）

そこへ甲冑を身に着けたグロッツの部下が現れた。

「報告します！シュレイナ様が到着されました」

「おお、そうか。それにしてもギリギリじゃなあ。よしそれじゃあ
時間じゃ皆の前に顔を出すかの」

くそして時は悟たちへ戻るく

「悟さん！よかったく間に合って、本当に心配してたんです！」

到着して周りを見渡すとアリシアさんがこちらに気づいてやってきた。

「うん、シュレイナのおかげだよ！おかげで間に合った」

「ホントよ全く！後先考えず突っ走って、こっちの身にもなりなさいよ！」

シュレイナはまだ怒っていたようだ、そこへアリシアさんのパートナーもこちらへやってきた。

「私からもお礼を言うわ。ありがとう……ってあなた、シュレイナって『シュレイナ・ロベルト』？」

パートナーの女性が驚いたようにシュレイナの顔を見て質問する。

「うん、あたしがシュレイナだけど……」

「うわー！本物だ！あの魔法学院を首席で卒業して毎年このウィザード・ストウラゴで優勝してる、シュレイナ・ロベルトさん！」

さっきまでのおとなしい感じとはえらく変わってずいぶん興奮した

様子だった。

「ちょっと、恥ずかしいからそんな大きな声で言わないでよ、あなた今年から参加してるの？」

「は、はい！あ、私、『カネア・ナスラム』と言います。去年学院を卒業して一年間訓練を積んでから今回が初めてで、でも全然だったんです……シュレイナさんに助けてくれなければ今頃……」

カネアさんがシュンとしていると、シュレイナがあることに気づいた。

「そういえばカネア、チームは3人1組のはずだけど……もう一人は？」

その言葉を聞いてからカネアさんの顔が更に暗くなる。

「もう一人は、途中で別々になって……まだ戻ってきてないんです。幸い火の石を三つ持っている人が一人でも到着すれば合格だったのでよかったのですが」

「何があったの？」

「それが……」

カネアさんが言いかけたとき、目の前に雷の玉がいきなり現れてそこからグロツツ様が現れた。

「えー一回戦突破の諸君まずはおめでとう、少々数は少ないがまあいいじやろう。ここにおらん者は後で人間界へ返すのじやよ。ここにいた時の記憶も消してな」

負けたら記憶を消されるのか、シュレイナやクロードの記憶、それはちよつと嫌だなあ。

「さて二回戦はチーム戦を行う。5人1組でチームをで戦うのじや。それではここにクジを用意した。誰からでも構わん、引いてくれ」

こうして僕たちを入れた4チームが出来上がり、それぞれにまとまった。そこにはアリシアさんもいた

「戦いは2週間後とする。その間に親睦を深めたりお互いに技を磨くのもいいじやろう。しかし他のチームとは戦うでないぞ、チーム内での訓練は許可する、それではこれにて解散じや。火の石はそれぞれ持ち帰って構わんぞ、わしのサービスじや」

僕らは出口から外へ出てその場を後にした。その頃別のチームでは……

「こんなもの持っていてもしようがないですね、その辺に捨てておきましょう」

そう言うのと小柄な少年はローブの中から大量の火の石を地面に捨てた。それに気づいたもう一人の男が

「君、その石！」

「ああこれですか？2回戦が40人もいるのは面倒ですからね、今のうちに倒させていただきました」

その言葉に驚きを隠せない三人と平然の佇む女性。

「あら、私はわかっていたわよ、誰かが意図的に人数を減らしたのも、それを誰がやったのかも」

「ほおそれはそれは、さすが僕の次にここへ到着した人間ですね、今回は楽しめそうだ」

「それはそうと、あなた、パートナーは？私が来たときもいませんでしたけど」

「ああそれなら少し離れた町で待機させてあります」

少年はあっちの方ですと指差しながら言う。

「え？それじゃあ君は一人でここまで！？」

「まあその話はいいいじゃないですか、先を急ぎましょう」

そう言うと少年は会場から離れていくが不思議なことに足音は聞えなかった。

足音は聞えなかった（後書き）

ここからはチーム戦になるので登場人物が一気に増えていきます。皆を均等に喋らそうと思ってるのですが、多分放置になる人も出てくると思います。特にクロードとか（笑）感想待ってます！！

一人になんてなりたくない！

僕はチームで泊まる宿に来ていた。

「本当によかった！まさかシュレイナと同じチームになれるなんてね、もしかしてグロツ様がしてくれたのかしら？　こうやってみんなで話すのもいづぶりかしらね」

どうやらカネアさん以外の三人は魔法学院での仲良しグループだったらしい。会場が出るなり学園時代の話をずっとしていた、そして今も。

「シュレイナったら一人で飛び級して先に卒業しちゃうんだから、それに去年も私達は初参加だったのに少しも手加減しないもんね？」

やっぱりシュレイナは負けず嫌いだったんだ。

「それは、あたしが戦いの厳しさってのを教えてあげたのよ！」

「それにしても、毎年優勝してる人がね」

「」「だよね？」

三人がそれぞれにグチを言っていた。それを見て男性陣のいつの間にか打ち解けあった。そしてその中にただ一人いすに座って俯いているカネアさんがいた。それに気づいたシュレイナは。

「あなたもよろしくね、カネア」

それに気づいたカネアさんはすぐに立ち上がってシュレイナの前に向き直った。

「こ、こちらこそっよろしくお願いします!」

と言って深くお辞儀をした。シュレイナは別にいいからいいから、と言って笑っていたが次第に真剣な顔になり。

「それより、あなたのもう一人のパートナーの話の途中だったわね。みんな聞いて!もう気づいてると思うけどここにいるアリシアちゃんのもう一人のパートナーがいらない事なんだけど、最初から……話してくれる?」

そしてカネアさんは重い口を開いた。

「はい、わかりました。あれは私達が最後の火の石を手に入れたすぐにあった出来事です」

（カネアの視点）

「やった！これで三つそろったわ！」

「ああ、後はゴールするだけだな！まだ時間もあるしここからは歩いて行くか。どうだ？アリシアそろそろ疲れてきたか？」

彼の名前は『カルマ・グレッタ』彼とは幼馴染で魔法がとても上手くて今回も彼のおかげでほとんどの戦いに勝利したようなものなんです。

「はい、歩きの方が私は助かります」

「相変わらずお前の敬語は抜けねえな。確かに歳は上だが別にタメ口でもいいんだけどなあ」

「そのうち慣れてくるわよ、さあ行きましょっ」

そんなときに、来たんです。あの闇が。

「おい、向こうの方おかしくねえか？何か黒いモヤみたいなのが、それに周りの木が……」

「え？」

それは一瞬この世の終わりかと思いました。その黒いモヤを中心に周りの植物が見る見るうちに枯れていくんです。

「おい！やばいぞこれ、走れ！！」

私達はすぐにその場を離れようと思いました。でも次第に黒いモヤが広がるスピードが速くなったんです、そこでカルマは……

「俺が様子を見てくるから先に行け！それとこれも持って」

「え？カルマさん！」

投げ渡されたのは火の石でした。カルマが三つとも持ってたんですけど全部渡して。

「わかったわ、ここはカルマに任せて行くわよアリシア」

それからアリシアと私は逃げ続けたんですがしばらくするとまた黒いモヤが追ってきたんです。そこにカルマの姿はありませんでした。

「何！？カルマは？……つく、アリシアこの火の石二つはあなたに渡すから一人で逃げなさい」

「え？……嫌です！一人になんてなりたくない！」

「あたしは必ずカルマと戻ってくるから、ゴール地点は教えたとおりに覚えてるでしょ？」

それでもアリシアはそこから動かずに。

「カネアさんまでいなくならないで！私は一人じゃ……」

「いいから！行きなさい！！」

私が声を上げて言うとアリシアは頷いて一人で逃げました。私は振り返り黒いモヤが近づいてきて……

『あなたは持っていますね？ 渡して下さい。さっきの人は抵抗されたからちょっと遊んじゃいましたけど…もう面倒なので…フフツ』

その声が聞えてからは何も覚えていません。気が付くと私は倒れていて、手の中にあった火の石はなくなっていました。私はすぐにアリシアの後を追うとゴール地点の近くの茂みに隠れていたアリシアを見つけました。

「カネアさん！」

「ごめんねアリシア、石…盗られちゃった」

「そうですか…でもカネアさんが戻ってきてくれて、私……」

アリシアが泣き出しそうになったので私が落ち着かせてると。

「カネアさん、私に考えがあるんですけど」

「どうしたの？ もう私達は失格よ、今さら何をしたって」

「ここに来る人たちに、私頼んでみます！ 火の石が余分にあるなら

どうにかして……」

「そんなの無理よ。いいのよまた来年もあるし」

もともと初参加の私が一回戦を突破することが出来たのもカルマの……

「私は嫌なんです！人間界に戻りたくない！」

そうよね、この子……

「気持ちわかるけど……」

「私、行ってきます！」

そう言ってアリシアはその場を離れてゴールする人たちに声をかけていったんです。

「あの子が自分から……」

でもやっぱりダメで、次々に断られました。そんなところへシユレ

イナさんたちが来てくれたんです。

一人になんてなりたくない！（後書き）

セリフばかりの回になってしまいましたね、それにいろいろ詰め込みすぎたような気がします・・・次回は他の人間界から来た仲間達を紹介します。

感想待ってます！！

あたし……あの子苦手かも

「これが私達に起こったことです。カルマは今もどこにいるかはわかりません。シュレイナさんたちが来てくれなかったら……今頃」

ここでカネアさんの話が途切れた。そして今度はシュレイナが口を開いた。

「そんな事があったの……今日の夜にでも私がおじいちゃんに聞いてみるわ。だから今は顔をあげなさい」

シュレイナがカネアさんの背中をさするとカネアさんは少し元氣になった。

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ氣を取り直して、みんなの自己紹介をしましょうか。悟、あんたから見本になりなさい」

「え、僕？何を言えば……」

「とりあえず名前と、歳ぐらい言っときなさい」

「わかった…名前は荒川 悟、12歳です」

「じゃあ、質問ある人っ」

シュレイナが皆に呼びかけるが少しの間、沈黙があった。けっこうこういうのって聞きづらいのもあるんだよね。そんな中一人の女性が手を挙げた。

「じゃあウチいいですか？」

その人は長身で長めの茶髪で陽気そうな関西弁だ、大阪の人かな。

「いいわよ」

「えっと、悟君やったっけ？自分は魔法の属性は何使うん？」

「あ、えっと水と雷です」

「ほゝ二つ使うんやあ。おおきに、次いってええよ」

その人がにんまりと笑って僕の方を見た。なんだろう。

「次からは自分の属性も言いましょうか、じゃあ次あなた」

と、言ってシュレイナはさっきの関西弁の女性を指名した。

「ん、ウチの名前は『崎野 葵』^{さきの あおい} 14歳、属性は火だけやけど結構魔法には自信あるさかい。よろしくやろな！あ、苗字やなくて名前と呼んでや！」

けっこうテンションの高い人だ。テーブルを囲うように座っていて葵さんは僕の左隣に座っていたので自動的に時計周りに自己紹介が始まった。次は柔道部の主将のようなゴツい体の男性だった。短い黒色の髪の毛をかきながら口を開いた。

「次は俺か。名前は『神室 大介』^{かむろ だいすけ} 俺も歳は14だ。属性は風と地。以上だ」

淡々と自己紹介を終え、次の人に回った。アリシアさんだ。

「私の名前は『クリス・アリシア』です。13歳で属性は水と風です。よ、よろしくお願いします」

と言って律儀に頭を下げる。そこに葵さんが質問をした。

「なあなあ！自分どこの国から来たん？金髪やし目え青いし、ごっつかわいらしい顔しとるな！」

ずばずば言われてアリシアさんもじもじしていて、焦っていた。

「えっと、出身はフランスです。5歳の頃に日本に来てずっと日本暮らしです」

「さやか、ええなあ。羨ましいわフランス」

葵さんが目を瞑りながら想像している自分がフランスにいる想像でもしているんだろうか？そんな姿を見てシュレイナが、

「えっと次行ってもいい？」

「あ、どうぞ、どうぞ」

申し訳なさそうにぺこぺこする葵さん。

次はグレーの少し長めの髪の毛で背丈は僕と同じくらいだけどどこか大人びていた。

「俺で最後か、名前は織田^{おだ} 陸斗^{りくと} 12歳。属性は火と雷だ」

僕と同年だ。それなのに何故か年上に見える。誰かに似ているなあ。

「みんな終わったわね。じゃあ次はみんなに二回戦で使う武器を選んでもらいましょうか」

その言葉に葵さんと大介さんがピクツツと反応した。

「武器！？ホンマにええの？よっしゃあ！ウチな、学校で剣道部やってん、しかも部長な！ほんでテレビで日本刀振り回してんの見ていつかウチも日本刀使って見たいなあって思ってたん！」

シュレイナがマシンガンのような言葉の銃弾に圧倒されながらも指を差しながらあっちに武器庫があると言うと葵さんは一目散に走っていった。

「あ、俺も！」

それにつられて大介さんもちょっと早足で向かった。葵さんほどじやなくてもこの人もウズウズしてたんだ。

「私達も行きましょうか」

アリシアさんに言われて僕と織田君も武器庫に向かった。

すれ違いざまにシュレイナがボソっとつぶやいた。

「あたし……あの子苦手かも」

「……………」

織田君とアリシアさんはなんの事だかわかっていなかったが僕にはわかった。シュレイナが押されるなんて……恐るべし関西人のしゃべり。

あたし……あの子苦手かも（後書き）

とりあえずメンバー4人の紹介でした。それぞれのパートナーはカネア以外はこの後はほとんど出ないつもりです……見た目的には皆さんのイメージにお任せしますただ女性キャラは葵は灼○のシ○ナを関西人にしたような感じでアリシアはISのシャ○のショートバ―ジョンだと思ってください。

感想待ってます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0003y/>

ウィザード・テイルズ

2011年12月3日19時45分発行